

回想文

高橋 亨先生との出会い

乾 澄子

二〇一二年三月一六日、高橋亨先生の最終講義が行われ、ある種の感慨をいただいて拝聴した。

一九七五年、東京大学大学院の博士課程を中退し、二才の若さで高橋亨先生が名古屋大学に講師として赴任された。奇しくも私が名古屋大学に入学した年だった。

大学に入って、希望に心がはずんでいた（と思う）私
は見るもの聞くもの楽しくて、中でも近代文学を勉強したいと思っていたので、近代文学の講義を片っ端から受講して、そういえば、少しは古典も勉強しようと思つた授業で、出会ってしまった、高橋先生の御講義に……

『堤中納言物語』だった。えっ、古典文学ってこんなに新鮮でおもしろいものなの？高校の時、古典が苦手ではなかったけれど、大学に入ってみればもちろん優秀な人がたくさん。岩波の旧古典文学大系の平安朝文学はほとんど目を通したという猛者もいて、とても私に古典文学の研究など出来るはずはない。しかし、高橋先生のお授

業を通して知っていく古典の世界のおもしろいこと、豊かなこと！

やがて、二年生後期になり、「国文学ではご飯を食べないから、やめて他の研究室に行きなさい」という後藤重郎先生の手を変え、品を変えの説得にもめげず（今はわからないが当時は志望者が多かったため、面接試験があった）、国文学研究室に進学。そこで高橋先生が源氏物語界のプリンスであることを先生方や院生の先輩から、お聞きする。しかし、どのようにプリンスであるか、そのすごさを知ったのは、卒業論文で源氏物語を取り上げようと決めてからであった。そういえば高橋先生にお声をかけていただいて、友人たち数人と学部生ながら中古文学会に出向き（先生は引率して連れて行く方ではない）、論文でお名前だけ存じている学会の大御所や、今をときめく綺羅星たちを、発表の内容はよくわからず、ただアイドルを見つめるまなざしでみていたのも

懐かしい思い出である。

テニス部に所属し不勉強な私は卒業後、大学院進学なんて夢にも考えず、一般企業に就職。その後いろいろあって大学院に進学した。そこから本格的に高橋先生のお世話になった。大学院でのゼミの授業はもちろんのこと、先生の研究室で新しい論文のお話を聞いたり、東京の源氏物語の一线の研究者の先生とご一緒する機会をいただいたり、教養部の他の分野の先生方との研究会の端っこに座らせてもらったり。先生のお宅で読書会をし、奥様の手料理をいただいたこともあった。いつもいつも先生のお話は、ちょっととした読み、目のつけどころ、論理の大きさ、何もかも刺激的であった。決して手取り足取り指導される方ではなかったけれど、先生が魅力的なお話になるすべてに啓発され、少しでも上に向こうと思わせるられるお導きであった。

当時、現在源氏物語界を牽引している方たちが若手研究者として、次々に魅力的な論文を発表、源氏物語研究は新しい風が吹き、活況を呈していた。何とか新しい源氏物語の読みに挑戦したいと思っていた私たちに、ある日後藤重郎先生が一言。「あなた方は高橋亨先生ではありません。高橋先生は諸本や古注や文学史の勉強をきっちりされた上で、なおかつ外国の理論も勉強され、その上

文章が達者でいらっしやる。基本が出来ていないあなたたちの感想文に過ぎません」。裏付けのない読みに走りがちな私たちへの警鐘だった。高橋先生の華麗でエレガントな論文の背後にあるものの厚みに眼を向けることを思い知らされた。その後藤先生は高橋先生のご論文を、いつもいち早くご覧になって、「あれ、読まれましたか。さすがでしたね」とおっしゃっては、まだ目にしていない私たちをあわてさせられた。

その後結婚して名古屋を離れ、研究からも遠ざかりがちであった私に、たまに学会や研究会を通してお会いする先生は、いつも変わりなくいろいろのお話をしてくださいました。直接的な学恩ははかりしれないが、ブランクの後研究の場に戻れたのは、学部、院生時代に教えていただいた、研究という世界の魅力が根っこにあった、と今あらためて思う。その後多くの優秀な後輩たちが活躍し、先生の最初の教え子の一人というにはあまりにもおこがましいが、先生と同期で名古屋大学に入ったのもなんかの縁と感謝しかない。

最終講義の前日までアメリカでお仕事をされていた。国際的に活躍される源氏物語界のプリンス（今はキング。でもお変わりない先生はやっぱりプリンスがふさわしいかも）に出会えたことは望外の幸せであった。

きっと先生は退官されて雑務から解放され、ますます
輝いたお仕事をされることであろう。心から、ご健康と
ご活躍をお祈りしております。先生、いろいろとお世話と
なり、ありがとうございます。そしてこれからもどうぞ
よろしくお導きください。